

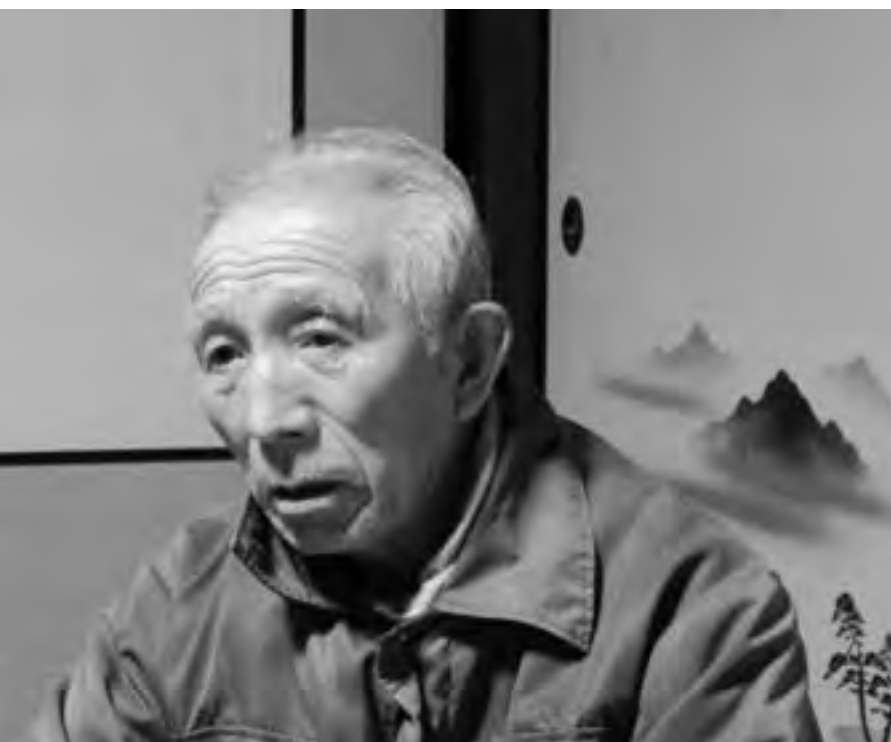
茅ふきたより

巻頭インタビュー

茅葺きの家は熟すると、
いい味になってくる

蔵 政次さん 茅葺き師

石川県能登町久田（旧柳田村久田）大正十年生まれ



▲能登町久田の自宅にて（2004年12月）

も く じ

01	巻頭インタビュー 蔵 政次さん
02	第二回茅葺きの里見学研修会 岩手県一関市にて
04	ITS（国際茅葺き協会）の総会に参加して
06	会員からの報告 白川村荻町旧寺口家屋根葺き報告
07	理事の紹介 松本継太
08	イベント情報 こうべ・すまい栄校
	第5回茅葺きフォーラム

ワシは27、28の時から葺いとるから、もう55年たつ。親の後を継いだから2代目や。今はめっきり茅葺き仕事が減ったけど、20年ほど前までは専門にやつとつて、けっこう忙しかったね。能登には今、それでも340〜350軒近くはまだあるやろ。その半分以上はトタンを被つとるけど。やつば多いがは珠洲と輪島やわ。

柳田あたりに、クロツケンというて大きい間口の家が何軒かある。9間×6間の入母屋や。葺くときも大変やし茅の調達も段取りしとかんならん。だから門前の阿岸本誓寺みたいに、茅集めから専門の人間を置いとかな、やれん。ワシらみたいに茅葺き仕事を専門にしとるのは、能登に4〜5人かな。中島さんとか河原さんとか。集落によつては、中の人だけでやつとるところもあるわ。ユイ（結）や。村の手慣れた人が棟にあがつてや。

能登のいい家やと岡部家とか喜多家、中島の室木家なんかの屋根葺きをやりましたわ。室木家は台風でハコ棟が傷んだのを、4人してのぼつて15日かかった。屋根の材料は、たいがいススキやけど、

集した

（2004年12月23日にインタビューしたものを編集した）

第二回茅葺きの里見学研修会

岩手県一関市にて

茅葺き文化再興へ

柳沢道生

残暑きびしきという常套句は、今年の東北も例外ではなかった。お盆を過ぎても35度近い気温が東北地方の主要都市上に示されていた。今回の旅は熱中症対策が肝要と、心して準備した。当日、現地は晴れ、暑さはそこそこ、まずは一安心。

8月24日(土)12時30分、一ノ関駅東口に集合した一行は、バスで岩手県指定文化財・村上家住宅「一関市千厩町小梨不動」へ。途中、道の駅かわさきで小休止。アプローチでは若干行きつ戻りつし、小一時間で村上家住宅駐車場に着いた。その一隅に、足場が組まれた茅葺き小屋。村上家住宅の刀自(とじ・女主人)・村上和子さんが会長を務める「かやぶき民家を残す会」の活動の一環・茅葺き職人育成プログラムの研修生が、茅屋根を葺いた東屋だ。この活動は、岩手日日新聞(平成24年11月5日)などでも報道され、現地での関心を集めている。傍らには茅小屋、こも茅屋根とは感服。

一行は緑に囲まれた県指定文化財・村上家住宅へ。一七〇〇年代築という重厚

な主屋、寄棟造の茅屋根上にある、家紋と彫刻の施された煙出しが目を引く。主屋の右手に独立棟の茅葺き馬屋、小さな民家ほどもあろうか。当地は「千の厩」にふさわしく、馬産地として名高かった。馬を主とする畜産で栄えた往時をうかがわせる規模だ。手前に茅葺きの厩、茅屋根が三棟並ぶ様式美。さらに主屋の裏手に二棟の茅葺き建築。小家という付属棟と木小屋が並ぶ。まさに壮観であった。

邸内で、一関市千厩支所長さんのご挨拶のあと、かやぶき民家を残す会のメンバー紹介に続き、村上会長から会の活動が報告された。村上さんが当家に嫁がれた頃、周囲の民家は殆ど茅屋根であったが、昭和30年代以降、屋根をトタンで覆う民家が急増、それにつれて茅葺き職人は減少していった。茅屋根の維持に危機感を持たれた会長は、残った茅葺き民家と協力し、会を立ち上げ、茅葺き職人育成に着手。現在第二期の研修生が育ちつつあり、駐車場の東屋はその成果である。

午後3時過ぎ、一行はバスで一関市千厩町と藤沢町の茅葺き民家を見学。千厩町小梨では、かやぶき民家を残す会副会長・佐藤憲一さん宅を遠望、付近に茅葺き民家がある一棟。さらに、藤沢町徳田で会員の千葉誠さん宅を遠望。次に訪れた藤沢町大籠は圧巻であった。街道沿いに茅葺き民家が三棟並ぶ。煙出しの形状

が微妙に異なっているのが興味深い。その奥に一棟あるようだ。街道の逆側にも一棟、ここには煙出しはない。そこからバスに乗り数分、会員の及川輝夫さん宅を訪問。ここで及川さんと当地の茅葺き職人の長老・山口さんの出迎えを受け、お話を伺う。山口さんは会の研修生の師匠である。及川さんの隣家も茅屋根。茅葺き民家が二棟並ぶ風景も好い。先程の一带と合せ、茅屋根密集地だ。

再びバスで藤沢町保呂羽の藤源寺へ。参道の巨木の並木の前に建つ山門、平成20年に山口さんを棟梁として茅屋根が復元された。木立ちを通ってくる風が爽やかだ。庫裏で冷茶をいただきながら、先代住職の奥様のお話を伺う。住職が兼任されている千厩町内のお寺ともども、震災復興の拠点となつたお話には感動した。お寺からバスで数分、藤沢町保呂羽の茅葺き民家を見学。現在、千厩町・藤沢町合せ、約40棟の茅葺き民家が残っているという。

当日の宿泊地、三嶋温泉・ホテル三嶋の湯へ。夕刻、現地の方々と交えた懇親会、そして旅の汗を流して就寝。

翌25日(日)、宿を8時30分過ぎに出発、一関市の北方・奥州市水沢区黒石町の正法寺へ。通称・奥の正法寺。かつて高貴な参詣者に下馬を促したという荒削りな石段。その上の総門をくぐると景観

に圧倒される。棟高約26m・勾配49度・面積720坪と日本最大の茅屋根を有する本堂、その右手の庫裏の茅屋根も大きい。修行僧・山口さんの案内で本堂に参拝、開山堂を見学。ここからの眺望は秀逸であった。元は船乗りで60歳過ぎて得度されたという、山口さんの軽妙な語り口が面白い。庫裏の裏手に茅屋根がもう一棟。住職の住まい、小方丈という。宝形造で方四間はあろうか。本堂・庫裏・総門は国の重文に指定されているが、このお堂は無指定。首都圏に単独で存在していたら、重文でもおかしくなろう。

当日は秋田県大曲市で全国花火競技大会が開催され、そのツアーバスで中尊寺



▲岩手県指定文化財 村上家住宅 主屋

周辺は混み合っているという。そこで、昼食は付近の黒石寺門前の蕎麦処・東光庵でいただく。黒石寺は裸祭り・蘇民祭で名高い。数年前、その裸男のポスターをJR車内などに掲示するのが妥当かで話題となり、蘇民祭はかえってその名をあげたというエピソードがある。

次に、水沢区黒石町の千葉勝也さん宅へ。千葉さんもちやぶき民家を残す会のメンバーである。慶長5年（1600）築の屋敷門を通ると主屋・付属棟と茅屋根が並んでいる。これも見事だ。千葉さんの案内で邸内へ。かつては北上川が付近を流れており船着場があった。千葉家は代々その管理者・舟胆入りを務めていた。その業務に欠かせなかった線香時計



▲千葉家主屋

を拝見した。12時間計はまああるが、24時間計はとても珍しいそう。庭には石巻の特産、稲井石がふんだんに敷かれていた。

さて、世界遺産中尊寺はやはり大変な混雑、境内へのバス道も大渋滞というところで、一行は参道下駐車場下車。ガイドさんの案内で参道を登る。あまり時間もなく急ぎ足、人ごみの中、あわただしい参詣・見学となった。まず、国宝・金色堂、茅屋根の重文・白山神社能舞台、茅屋根の弁財天堂と鐘楼、本堂とめぐる。茅屋根のお休処・積善院は参道からちら見。ガイドさんは奥州藤原氏時代の遺構には無論詳しいが、伊達藩政時代が主の茅葺き建築にはさほど興味が無いようであった。

バスで一ノ関駅に向かう途中、一関市田村町の県指定文化財・旧沼田家住宅に立ち寄る。茅屋根寄棟造、旧一関藩家老の居宅。家老屋敷というより、今に例えれば一関市役所・助役級の公務員住宅か。隣の国登録文化財・日本基督教団一関教会とともに、街中に清々しい風情をかもしだしていた。午後4時前に一ノ関駅前着。一泊二日の充実した行程を終えた。私が古民家の旅に参加したのは、平成17年のこと。山梨県の塩山駅前、甘草屋敷で催された研修会での村上会長のスピーチ、茅屋根の魅力とその維持・保全

の難しさ、特に屋根葺きさんの後継者問題について、熱く切々と語られたお話が思い浮かぶ。かやぶき民家を守る会を結成され、職人を育成し、あの東屋の茅屋根に結実された。しかし、今回のお話で、その前段に柱は曲り、朽ちかけた我が家をよみがえらせたご努力があったことを知り、さらに感銘を受けた。

今回の旅で特に印象に残ったのは、一関市藤沢町大籠地区だ。茅屋根の密度と多様性のみならず、近くにキリシタン殉教公園がある。これも知られざる史跡だ。これらを有機的に結び、単なる保存・維持ではなく、新しい地域の光として、よみがえさせられれば、地域活性化の全国的なモデルとなるのでは。今回の旅実現に尽力された方々に深く感謝したい。

研修に参加して

美山茅葺株式会社 大野 沙織

一ノ関を訪れて、初めに驚いたのは、村が広いということでした。田畑や林の広がるなだらかな丘陵地帯に、エグネ（屋敷林）に守られるように家々が点在するというこの地域の農村景観は、私の見慣れた関西の村々とは大きく異なり、とても新鮮でした。

今回は県指定文化財・村上家住宅の他に、文化財に指定されていないたくさん茅葺き民家を見学させて頂きました。茅葺きの主屋と馬屋などの茅葺きの小屋があり、その周囲にエグネが広がるという、この地域の伝統的な家の形が、かうじてではありませんが、住まわれている方たちの手によって残されていることに驚きました。しかしこの農村景観は数十年前までは当たり前のものであったため、その保存に対する地元意識は高くないのが現状だそうです。その中で20年以上前より茅葺き民家や技術の保存を訴えてこられた、村上和子さん達『かやぶき民家を残す会』の地道な活動には頭が下がる思いです。

高度経済成長期以降人々の生活は一変し、屋根を茅で葺くという営みも、伝統的な農村景観も、今や過去の遺物になってしまったように思われがちです。しかしその営みや形の中には、何千年もの年月をかけて培われた先人たちの知恵が詰まっています。この数十年の変化によって、それらを失ってしまうことはとても大きな財産を失うことなのではないでしょうか。私たちはこれらを後世に伝えねばならない、これらを伝えるために行動を起こす最後のチャンスは今なのではないかと、一ノ関の茅葺きの里を眺めながら感じました。

ITS (国際茅葺き協会) の総会に参加して

東京大学 山本博一



2月の中旬に南アフリカで開催されたITS (国際茅葺き協会) の総会に参加しましたので、その模様を報告します。

この国は南半球にあるので季節が日本と逆で、真夏に訪れることとなりました。雪の日本を出てきましたが、丸一日かけてたどり着いた現地は連日35度以上の気温でこの温度差には参りました。しかし、湿度はさほど高くなく、カラッとした氣候で朝晩は暑さも和らいで、比較的過ごしやすい氣候でした。



▲ステレンボッシュ (写真1)

この会は元来オランダの茅葺き協会が定期的に開催していたものを、英国、スウェーデン、デンマーク、ドイツの5カ国持ち回りで、2012年から国際的な集まりを持つことになったものです。2012年からは南アフリカと日本も参加するようになり、現在は7カ国で構成されています。今回は南アフリカがホスト国となり、会員の家族も含めて100名近くの関係者が一堂に会する場となりました。会場は南アフリカの南部でケープタウンの隣町ステレンボッシュというところで開催されました。南アフリカは人類発祥の地とも言われており、約200万年前の人骨や化石が見つかった洞窟は世界遺産に登録されています。喜望峰があることでも知られていて、500年以上前からヨーロッパ人に注目されていました。17世紀になるとオランダ人が多く入植してボーア人と呼ばれるようになりました。そのためケープタウンは古くからヨーロッパの影響を受けていて、街を歩いてもアフリカに在ることを忘れさせてしまうような雰囲気があります。総会が開催されたステレンボッシュはケープタウンから車で1時間程の距離にあり、17世紀に開かれたケープタウンに次いで南アフリカで2番目に古い町と言われている、古い様式の建物も遺されています (写真1)。



▲ブドウ畑 (写真2)

この地域は地中海氣候で土地が肥沃なため、古くからワイン造りのためのブドウ栽培が行われてきました (写真2)。

ここは南アフリカワインの産地としてワインランドと呼ばれています。300年以上前からのケープダッチ様式と呼ばれる白壁と茅葺き屋根の美しい建物が点在する観光ルートになっています (写真3、4)。

数多くあるワイナリー (造り酒屋) では見学はもちろん、利き酒を楽しむこともできます。酒蔵は茅葺き屋根の建物で、温度や湿度の変化が少なくなるように工夫されています (写真5)。

南アフリカは欧米からのリゾート地として知ら



▲茅葺きワイナリー (写真3)

◀上、ワイナリー内部 (写真4) 下、酒蔵 (写真5)

れており、長期滞在型のホテルなどに高級感のある茅葺き屋根が数多く使われており (写真6)、そのためにアフリカでは唯一茅葺き協会が設立されています。

▼焼け落ち時



▼着火時



▲着火実験 手前が通常、奥が難燃処理を施した茅葺き屋根（写真7）



▲高級ホテル屋根（写真6）

開催中に野外での実演会や茅を用いた競技会さらに難燃剤による着火実験が開催されました。中でも耐火性能の向上はどの国においても喫緊の課題で高い注目を浴びていました。当日に葺かれた実験材を通常の茅葺き屋根と難燃処理を施した屋根（写真7）に同時に着火して、屋根材が燃え落ちるまでの時間を計測していました。およそ35分後に通常の屋根が燃え落ちたのに対して、難燃処理の施された屋根では火は収まっていました。

各国の屋根葺き実演では地元の南アフリカが最も本格的な実演を見せていたが、参加各国も限られた時間と道具のなかでそれぞれ工夫をこらして持ち味を披露しました。（写真8、9）。さらに、競技会では日頃から扱い慣れているカヤの束をどれだけ遠くに飛ばせるか距離を競うものと、正確に飛ばして的確に当てることを競って参加者の親睦を深めました。

茅葺きの建物で開催された総会では各国からのプレゼンテーションで代表的な建造物やそれぞれの課題が披露されました。どうしてもいま抱えている問題点に話が集まりました。特に、建物に対する規制の情報が交換され、特に耐火性能の向上と普及について更なる取り組みが必要であることが議論され、日本からは総会主催の申し出がなされました。ただし、ヨーロッパからでは旅費がかさむためそ



▲屋根葺き実演、南アフリカ（写真8）



▲屋根葺き実演、オランダ（写真9）

の積み立ての時間を見込んで2017年に総会開催の方向で話を進めることになりました。

一方、南アフリカは人種差別政策（アパルトヘイト）でも有名な国であります。その象徴となっていたマンデラ元大統領が20年近くにわたって投獄されていたロベン島を見学しました（写真10）。ケープタウンの街からも見えていて、船で30分で行くことができます。今は世界遺産となり、収容所は閉鎖になっていますが、この国の別の一面を見ることになりました。南アフリカはアフリカの中では最も平均所得の高い国ですが未だに貧富の格差は著しく、郊外にはトタン葺きの低所得者の住居が並んでいました。ケープタウンは比較的治安も良く観光客には過ごしやすい街という印象ですが、一歩間違えてこうした地域に迷い込むと、厳しい現実に直面するということも事実です。



▲ロベン島収容所（写真10）

会員からの報告

白川村荻町

旧寺口家屋根葺き報告



平成25年10月27日、日本ナショナルトラスト所有の「旧寺口家住宅」の屋根葺きが行なわれました。前回は平成8年に行われており、17年ぶりの葺き替えになります。事業主体である日本ナショナルトラストさんの希望により「結い」による屋根葺きを行っていた地元の「白川郷荻町集落の自然環境を守る会」をはじめ荻町区長、合掌家屋保存組合など地域



団体が中心となって「結い」の屋根葺きの準備をすすめてまいりました。しかし、当日は台風の影響で、予定していたナショナルトラスト会員の皆さんのボランティア参加が安全性を考慮して中止となり、1日延期して村民による屋根葺きとなりました。27日は8時半に集合、住民作業者68名、女性賄い10名、小中学生10名、当協会の安藤代表理事はじめ、ナショナルトラスト・筑波大学・当協会等の関係者18名の総勢106名の参加者のもと、作業が開始されました。

荻町における「結い」の屋根葺きは平成21年度以来行われておらず、4年ぶりの「結い」となるため、地元合掌家屋保存組合では、7月27日に荻町区民を対象とした屋根葺き講習会を開催しネソの採取にはじまりネソ練りの仕方、縄の結束、茅の並べ方、押し鉾の結束の仕方など一連の工程を学び、迎える旧寺口家の「結い」の屋根葺きに備えました。参加者の顔を眺めていると久々の屋根葺きにみんな顔が生き生きとしています。

今白川村では「結い」の伝統が大きな課題となっています。昔から白川村では、屋根葺きを職業とするいわゆる「茅手」は存在せず、屋根葺きの全ての工程を村人の相互扶助により行い、その技術が白川村の伝統的な屋根葺き技術として今日に受け継がれています。しかし、日本の



近代化、高度経済成長の波に押され、数々の合掌造りが村から姿を消した現在、村における「結い」のあり方も変化し続けています。「結い」は、現在は合掌家屋保存組合を中心とした組合員の出役による「結い」（地元では「現代結い」と呼んでいます。）により続けられています。が、その「結い」の継承も世代が交代して未だ屋根葺きを経験したことがないという村人もでてきています。少なくとも1年に一件は「結い」の屋根葺きが出来ないかと合掌家屋保存組合を中心に取り組んでいるところです。

そのような背景の中、久々に行われた旧寺口家の屋根葺きは、今後の「結い」

のあり方を考える良いきっかけになりました。事前準備の打ち合わせ会では、今後の「結い」の継承のスタンダードとなるにはどうしたらよいか議論が重ねられ、「結い」を行う施主の負担となっている「賄い」の負担を極力和らげる工夫をしようということで、昼食はそれぞれ家に帰って食べるということになりました。打ち合わせ会の中での話しでは、もともとの「結い」の賄い自体も時代に伴って豪華になっていた節があるということ、もともとは昼食の提供などとはなかったという話もあり、極力昔に戻してはということであるような方針となりました。当日の作業は順調に進み、針刺し、



フキガヤ、カケヤ振り、茅上げ茅運び、賄い等それぞれの役割を淡々とこなしていきます。やはり屋根葺きになるとみなさん大張り切りで、大きな声で声を掛け合い、平葺きのペースを調整しながら葺き上げていきます。作業は17時頃には棟下まで葺き上がり最後に記念撮影をして作業完了となりました。

その後、恒例の直会（なおりい）が荻町多目的集会施設で行われ大宴会が始まります。会の最後の方ではどこからともなく民謡が歌い出され、みんなで歌って踊って屋根の完成を祝います。

「結い」の屋根葺きの良い所は、屋根葺き技術の継承だけではなく、みんなの



力で茅葺き屋根を守るという思いを互いに共有し実感できるという所にあると思います。荻町の人々は日頃いろいろなつらいことも感じながら保存活動をされています。しかし、屋根葺きを終えると皆すがすがしい顔になり、「またやりたい」と思うのです。そういった思いを維持し続けるためにも「結い」の継承を地元一丸となつて考えていきたいと思っています。

今回の旧寺口家「結い」の屋根葺きは、日本ナショナルトラスト事務局の皆さんをはじめ、筑波大学、当協会事務局の皆さんのご協力を得ながら無事完了する事ができました。この紙面をお借りして、厚く御礼申し上げます。

（当協会理事 松本継太）

理事の紹介

松本 継太

白川村教育委員会

白川村で文化財担当をしている松本です。私は大学卒業後白川村に赴任して以来合掌造り民家の修理を担当してきました。赴任して今年で15年になりますが赴任当時を思い起こしてみますと、まずは屋根葺きだろうということで、とにかく

屋根葺きの現場におじゃまして仲間にいられたことを思い出します。白川村では「結い」による屋根葺きがまだ残っていますが、「結い」の屋根葺きを初めて見たときの感動は今でも覚えています。村の人々は、誰に言われるでもなくそれぞれで持ち場につき役割をこなしていきます。「この人たちはなんで、屋根葺きさんでもないのにこんなにかっこよくちやっこお仕事ができるんだらう。」と驚きとともに大変感動したものでした。屋根葺きが終わると大宴会がはじまるわけですが、またこの宴会が楽しくて、みんなで民謡を踊ったりと大盛り上がりです。白川村では昔から屋根葺きは、結婚式や葬式などの出役人足の延長にある相互扶助の精神の中で当たり前に行われてきました。この「当たり前」に屋根葺きをやるといふ感覚をいかに後世に伝えていくのかということが、現在の白川村の屋根葺きの課題です。

自分自身の仕事の中でこの感覚の育成にどう携わっていけるのか自問自答している毎日ですが、私がいま継続的に取り組んでいるのが小学校の総合学習の時間への出前授業です。この授業では合掌造り民家の基礎知識や「結い」の講習からはじまり、最終的には合掌造りの原寸小屋組をみんなで組み立てるところまで行います。原寸小屋組みの組み立て作業で

は、又首材とヤナカ材の縄の結束法である「ハコ巻き」の方法を覚えてもらった、ヤナカとクダリを結束するネソによる結束やネソの拵えなどの一連の作業を学んでもらいます。この作業を通じて子供たちには「声をかけ合って作業をする。」ことを授業の目当てに据えて取り組んでもらい、共同作業を体で感じてもらうことを心がけて取り組んでいます。

このような授業を通じて、村の子供たちには未来の世界遺産を担うのは自分たちなんだという自覚を少しでも持つてもらえればと思っています。



こうべ・すまい楽校

『茅葺き × デザイン』一草のリズムで暮らしていく。あたらしい茅葺きー

日 時：(全4回 ※ 第1回は終了)

第2回 ひと × 自然 一生態系をつなぐ茅葺きー

2014年05月10日(土) 13:30 ~ 15:30

講師：塩澤実+橋本 佳延(兵庫県立 人と自然の博物館
自然・環境再生研究部 主任研究員)

第3回 ひと × ひと 一生き方をつなぐ茅葺きー

2014年06月14日(土) 13:30 ~ 15:30

講師：塩澤実+相良 育弥(淡河かやぶき屋根保存会
くさかんむり 代表)

第4回 自分 × 茅葺き 一手で考えてみるー

2014年07月12日(土) 13:30 ~ 15:30

講師：茅葺屋+くさかんむり
※ 茅葺き体験ワークショップ

会 場：こうべまちづくり会館(神戸市中央区元町通4-2-14)

※ 第4回のみデザイン・クリエイティブセンター神戸 KIITO

参加費：無料

定 員：80名(全4回の受講が前提/先着順)

申込み：神戸市すまいの安心支援センター

“すまいるネット”セミナー係

神戸市中央区雲井通5-3-1 サンパル4階

T E L : 078-222-0186 F A X : 078-222-0106

メール：seminar@kobe-sumai-machi.or.jp

第5回茅葺きフォーラム

「ヨシ原の再生とヨシ葺きの復活」

主催/日本茅葺き文化協会 共催/長浜観光協会 後援/長浜市 (予定)

日 時：2014年6月14日(土) ~ 15日(日)

会 場：慶雲館(JR 長浜駅から徒歩3分)

宿 泊：グリーンホテル Yes 長浜 みなと館(JR 長浜駅から徒歩5分)

参加費：[資料費] 一般【2,000】円、会員・学生【1,000】円

[情報交換会費]【3,000】円(各地の飲みもの持ち込み大歓迎!)

[宿泊費]【7,000】円(税込・1泊朝食付)

[見学会費] Aコース(半日)【3,000】円

Bコース(1日)【4,000】円

お申込み、お問合せ：日本茅葺き文化協会事務局

【6月14日(土)】

10:30 会場、受付開始

11:30 日本茅葺き文化協会総会

13:30 第5回茅葺きフォーラム

第1セッション「琵琶湖をめぐるヨシ原と茅葺きの現在と未来」

第2セッション「各地からの報告」

17:30 閉会

18:00 情報交換会

【6月15日(日)】

8:30~13:30 Aコース

八木浜集落、西徳寺、重要文化財辻家住宅

昼食 長浜黒壁スクエア(自由)

8:30~16:30 Bコース

Aコース+西の湖(近江八幡市)のヨシ原、ヨシ地



◎みなさんの情報をお寄せ下さい！
茅葺きについてさまざまな情報とご意見・ご要望をお待ちしております。
茅刈り、葺き替え情報大歓迎。事務局宛までお寄せ下さい。

茅ふきたより 第12号

2014年3月31日発行(非売品)

発行：一般社団法人日本茅葺き文化協会

編集：茅ふきたより編集委員会

一般社団法人日本茅葺き文化協会

〒300-4231 茨城県つくば市北条184

TEL/FAX 029・867・5829

E-mail info@kayabun.or.jp

URL http://www.kayabun.or.jp

（編集後記）
今年滋賀県長浜市でヨシを中心とした話題で茅葺きフォーラムを開催します。湖北の民家、ヨシ原、茅場の環境保全、ヨシ葺き、民家再生の活動など、話題も盛りだくさんです。みなさんと初夏の琵琶湖でお会いできるのを楽しみにしています。(弥)